栃の実

発行　一般社団法人栃木県作業療法士会　仲田 和恵
編集　一般社団法人栃木県作業療法士会広報部
国際医療福祉大学
TEL　0287-24-3015　FAX　0287-24-3016

目　次

巻頭言……1
特　集……3
各部委員会……6
書　評……11
ほOTひと息……12
編集後記……12

巻頭言



『“生き応え”という意味』

一般社団法人Ｂｒｉｄｇｅ　**山口 理貴**

皆さまは、2023年1月20日（金）に日本作業療法協会士協会主催でオンライン配信された、『作業療法の基礎固めに尽力された４人の受章者に聞く』をご覧になられただろうか。

叙勲受章をされた、寺山久美子先生、杉原素子先生、鎌倉矩子先生、冨岡詔子先生の４名の先生方の思いを聞ける貴重な機会であった。

私は大学時代に有難くも、杉原先生、鎌倉先生の授業を受ける事ができた。ただその先生方からの言葉の意味を自分なりに捉え始めたのは臨床が始まってからであるように思う。

2016年国際医療福祉大学にて行われた第７回栃木県作業療法学会で杉原先生が講演をされ、その資料ではＡ４用紙で「医学的リハビリテーションに関する現状と対策（1962年、大村潤四郎）」より引用した“リハビリテーション過程と担当施設”の図が配布された。作業療法の立ち位置を明白にお話されていた事を記憶している。

また大学時代の教科書「作業療法の世界（鎌倉矩子著）」は、臨床を初めて数年後からじっくり読みこんだ記憶がある。特に“作業療法における作業の意義とセラピストの役割”という図は、日々の自身の支援における姿勢を整理する大きな助けとなった。

私は新卒から就労支援分野に従事し、就労支援事業所やハローワークに勤務した後、現在は主に障害者雇用をする企業に対してコンサルテーションを行い当事者･職場とも働きやすい環境作りに取り組んでいる。その対象は当事者でもあり、企業で共に働く人でもある。ただ今までのどの時点を振り返っても、作業療法の

立ち位置やセラピストの役割の考え方に当てはまっているように思える。

要するに、分野・時代に関係なく全く朽ちないのである。

そのような経緯もあり、今回の先生方の話をとても楽しみにしていた。無論、各先生方から学びとなる言葉が多くあったが、ここでは心に残った鎌倉先生の言葉を紹介したい。

「鎌倉先生にとって作業療法」とはずばり何でしょうか？の質問の答え。

「“生き応え”を感じさせてもらえる時間と場所でした」

“生き応え”。鎌倉先生の造語であるとのこと。

“生きがい”や“役割”という既成の言葉ともまた違った印象があり、その言葉の意味を考えた。

“応え”という言葉に焦点をあてると「読み応え」「噛み応え」等の比較的馴染みのある言葉が浮かぶ。改めて意味を調べると、その行為「読む」「噛む」を強く実感し充実感があること、またその行為をする事に労力を要する意味を表している。すなわち“生き応え”とは「労力を要しながら生きていることを強く実感し、充実感のある状態」を指す言葉であると思えた。

それは“生きがい”や“役割”といった言葉の意味を含みつつも、さらに年月をかけて対峙し、苦楽の体験を経たものに対して使われる言葉のように感じた。

臨床の場面で、生活に困難さを感じながらも懸命に暮らしている方の話を聞くと、その方が“生きている”事を強く感じる時がある。

自身の臨床は対象者の生き応えに繋がる関与ができているだろうか、自分自身の生き応えといえるものは何だろうか。様々考えさせられる言葉となっている。

まだご覧になられていない方は、日本作業療法協会ポータルサイトからアーカイブが見られるので、是非ご覧いただきたい。



特　集

第 22 回全国障害者スポーツ大会

いちご一会とちぎ大会　活動報告

全国障害者スポーツ大会とは、昭和 39 年（1964 年）に開催された東京パラリンピックをきっかけに、その翌年からはじまった大会で、公益財団法人日本パラスポーツ協会をはじめ、文部科学省や都道府県・指定都市が主催し、毎年、国民体育大会のあと、同じ開催地で行われています。この大会は、障がいのある方がスポーツ大会に参加し、スポーツを楽しむことはもちろん、国民の障がいに対する理解を深め、障がいのある方の社会参加を推進させることが目的です。（公益財団法人 日本パラスポーツ協会 HP より一部抜粋）

昨年の 10 月 28 日（金）から 10 月 31 日（月）の４日間に栃木県で全国障害者スポーツ大会「いちご一会とちぎ大会」が開催されました。当会は栃木県国体・全国障害者スポーツ大会局の依頼を受け、県内の他専門職団体と協力して大会当日のコンディショニングルームの運営を行いました。コンディショニングルームは、大会に参加する選手に対してテーピングやマッサージ等によるケアやリラクゼーションを主としたサービスを提供するために大会が設置しているものです。

当会では事業部に窓口を置き 2020 年より準備を進め、協力者の募集は県士会のホームページ等での公募により行いました。身体障害領域、精神障害領域、発達領域、養成校と様々な領域より、新卒からベテランまで幅広い年代の OT１６名にご協力いただき、フライングディスク（身体・知的）、バレーボール（精神）、ボーリング（知的）の３競技に派遣をしました。大会までに「全国障害者スポーツ大会の概要」「テーピング研修」「マッサージ研修」の３回の研修会を設けて、普段の臨床でスポーツに係らない方でも当日に活かせる知識や手技の共有を行いました。

当日の施術内容は、マッサージやストレッチが主で必要に応じてテーピングやアイシングを実施しました。（施術件数は下記の表を参照）

	施術延べ人数（単位：人）	マッサージ（単位：件）	ストレッチ（単位：件）	テーピング（単位：件）	アイシング（単位：件）
フライングディスク（身体・知的）	122	118	30	3	0
ボーリング（知的）	47	44	24	8	1
バレーボール（精神）	56	45	7	10	3

（コンディショニングルームを設置した４日間の合計数。１選手に対して複数の項目を実施した場合はそれぞれ１とカウントした。）




テーピング研修会（左：講義、右：テーピング実技）




フライングディスク会場（左：コンディショニングルーム外観、右：施術場面）




ボーリング会場（左：コンディショニングルーム内、右：施術場面）




バレーボール会場（左：コンディショニングルーム受付、右：施術場面）

コンディショニングルーム従事者



株式会社 challenge ちゃれんじ元今泉教室　**髙橋 佳寛 さん**

第 22 回全国障害者スポーツ大会知的障がい者ボーリングのコンディショニングルームに従事いたしました。コンディショニングルームでの主な活動内容は、競技前の調整や競技後の疼痛、疲労緩和を目的としたマッサージやテーピング、ストレッチでした。身体的負荷が少ないという競技特性からか、選手の方々にお話を聞いていると「こういった所に初めて来た。マッサージをしてもらうのは初めてだ。」とお話しされる方が多い印象でした。そういった選手の中には「痛い所とかはないけど (マッサージやテーピングを) やってもらいたい」と訴える選手もいました。運動時痛がなく、明らかにテーピングが必要ない場合も訴えがある場合は、選手自身の心理的安定のために、可動域を大きく制限させず競技に支障が出ないようテーピングを実施しました。必要がないからテーピングをしないのではなく、どうして選手はそれを望み訴えたのか、会話一つからメッセージを拾い上げ理解しようとする能力は作業療法士の強みであり、今回私自身がそれを再確認できた良い機会となりました。



倉持整形外科・皮膚科美容皮膚科　**渡邊 愛美 さん**

精神バレーボール領域のコンディショニングルームにて、競技前後の選手のマッサージやテーピングを行いました。

現場経験の少ない状態での参加となりましたが、作業療法士としてスポーツ現場に携わることができたこと率直に嬉しく思います。身体領域と精神領域の専門性を兼ね備え、個々人に見合った適切な関わり方を瞬時に選択することや、心身ともにベストな状態を作り上げることができる点は作業療法士としてのやり甲斐のひとつと言えるのではないかと思います。また、スポーツを通して身体を動かし他者と関わる中で、同じ目標や時間を共有し、一瞬一瞬の喜び、悲しみなどさまざまな感情を知るきっかけにもなる時間であると感じました。その一瞬の出来事がその人の生きがいとなり、より良い生活を送るひとつのきっかけになってくれたら嬉しく思います。今大会では、コンディショニング調整といった形で各選手の生活のひとときに携われたこと、誇りに思います。

「いちご一会とちぎ大会」にご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

栃木県作業療法士会 事業部

各部委員会

災害リハビリテーション対策委員会

災害リハビリテーション対策委員会からお知らせ

災害リハビリテーション対策委員会　委員長　**熊倉 万実子**

平素より当委員会へのご理解ご協力をありがとうございます。
近年は災害が身近なこととなってきており、情報が入ってきた時点での「スイッチ」の切り替えが必要になります。「スイッチ」を入れてどのように自分が行動すべきか、それは平時より自分を守ること、家族を守ること、友人・職場・利用者を守ること、住んでいる地域を守ることとはどういうことか、考えて話し合っておくことで災害時に行動に移すことができます。当委員会はそのような災害について考える機会の提供や情報提供の場、また災害ボランティア育成の場となればと考えております。

災害リハビリテーションに関する情報について

① 令和４年度災害リハビリテーション研修会
令和５年２月11日（土）10：00～16：00
参加費無料／参加者50名
申し込みURL https://forms.gle/LtuBmR5cpHwXrWi97
今年度も専門職協会災害対策部を中心として研修会を企画しております。
講師の佐藤亮先生は（山鹿温泉リハビリテーション病院、公益社団法人熊本県理学療法士協会理事）平成28年（2016年）熊本地震における JRAT 熊本本部活動をされた経管から災害支援の教育にご尽力されております。グループワーク形式の体験ゲームなど複数ご考案されており、今回もその中の一つ DREAG（災害リハビリテーション支援）を行う予定です。

② 令和４年度厚生労働省委託事業「在宅医療関連講師人材養成事業」における 研修会

配信期間：令和４(2022)年12月20日（火）～令和５(2023)年２月28日（火） 参加登録不要

動画配信 URL

【総論：19 コマ 約 10 時間】

https://www.youtube.com/playlist?list=PLfJUlJePZO8BOGLuk7qzU2sOR　KZ4gxfdj

【各論：10 コマ 約５時間】

https://youtube.com/playlist?list=PLfJUlJePZO8CIXm3WxQtPBA7iT8KgqpKP

厚生労働省医政局地域医療計画課から在宅医療に関する人材 育成を支える高度人材を養成するため、上記研修会の案内が来ております。この中で在宅における災害時対応に関する研修会も含まれておりますので、ぜひご視聴いただければと思います。

災害リハビリボランティア登録と更新について

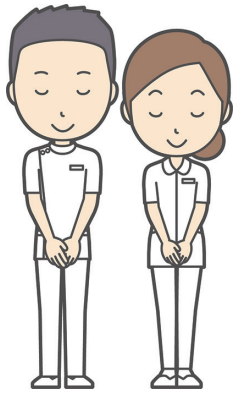
今回、新規ボランティア登録を行っております。ボランティアとして有事の際に私たち委員と一緒に活動してくださる方、また、興味がありこれから勉強をしていきたいと考えている方への情報提供の場でありたいと考えております。すでにご登録の方も登録変更がある場合にはボランティア登録の情報更新をお願いいたします。

施設管理の立場にある方におかれましては施設内のスタッフのボランティア登録・派遣への理解調整と共に各施設における BCP（災害後の業務復旧計画）の再確認、この機会に地域における災害時対応の確認も併せてお願いできればと考えております。

災害は平時からの備えが大切であると言われております。ぜひこの機会に災害について再考いただき、ボランティア登録についてもご検討いただければと思います。

登録 URL https://forms.gle/nvUPYQ79Yp9oci719

第２回　ボランティア登録締め切り　２月 28 日まで



令和4年度

災害リハビリテーション研修会

主催：栃木県リハビリテーション専門職協会
後援：栃木JRAT

講 師　**佐藤　亮先生**　熊本JRAT　事務局次長
公益社団法人　熊本県理学療法士協会　理事
医療法人社団木星会 山鹿温泉リハビリテーション病院
総合リハビリテーション部　部長

日 時　2023年 2月11日(土) 10:00～16:00 (受付9：30～)

会 場　健康の森　とちぎ生きがいづくりセンター　教室C

定 員　50名(先着順)　**参加費**　無料

対 象　栃木県士会員（PT・OT・ ST）

内 容

1.講義（災害リハの基礎知識の習得）
①地域リハビリテーション・災害リハビリテーションについて
②災害リハビリテーションの実際

2.演習（グループワーク）
①災害リハビリテーション演習、事例解説・対応
②DREAG　仮想避難所での基本的なリハ支援を体験するゲーム

3.アンケート（災害リハについての学びの確認）
講義・演習前後のアンケート、テスト

災害リハ教育にご尽力されている佐藤先生をお招きし、災害リハで活動する際に共通言語として必要な基礎知識や支援内容についてを講義・演習を通して学ぶことができます。

ぜひお気軽にご参加ください。

申し込み方法： 下記URL・QRコードからお申し込み下さい。
https://forms.gle/hLKPC8NgP9s5joHi9

申し込み締め切り： 2023年2月5日(日)まで

◎参加される方は、会場内での感染対策にご協力ください（マスク、手指消毒、入場前の検温など）。
また、1日を通しての研修になりますので、昼食をご持参の上、ご参加お願いします。
◎体調不良等の理由で参加をキャンセルされる場合は、下記メールアドレスにご連絡ください。
◎新型コロナウイルスの感染状況によっては、研修会をオンライン開催に変更させて頂き、内容にも変更があります。その際は、お申し込みの方にメール等でお知らせいたします。

お問い合わせ： 那須赤十字病院　OT　熊倉万実子
電話： 0287 - 23 - 1122
メールアドレス： rehakyo.saigai@gmail.com

住宅改修・福祉用具委員会

住宅改修・福祉用具委員会　2022 年度活動報告

住宅改修・福祉用具委員会では、３件の研修会を実施しました。来年度も同様の研修会を予定しております。皆様のご参加をお待ちしております。







障がい者や高齢者の生活を豊かにするために発明・工夫した福祉用具や便利な道具を発掘して、優れた作品を表彰する
「とちぎ福祉用具・自助具“発明・工夫・適応”コンテスト」2005 年から始めており、今年度も開催しました‼



詳しくは，こちらをご覧下さい

栃木県作業療法士会ホームページ
https://www.tochi-ot.com/ot/hrwe-committee/

地域リハビリテーション推進部

認知症 ～地域での取り組みと専門職にできること～

県北ブロック長　今市病院　**大藤 雅史**

2023年1月26日(木)に2022年度地域リハビリテーション推進部県北ブロック×認知症ケア対策推進部門コラボレーション研修会が開催されました。研修会では、「認知症～地域での取り組みと専門職ができること～」をテーマに塩谷町の行政の方と塩谷町担当の作業療法士から実際の地域での取り組みについて講義していただきました。また、後半は事例を通して各専門職にできることをグループワークを通して検討し、連携強化、作業療法士の啓発に繋がったと思います。また、行政の方の参加もあり行政の視点を学ぶ機会となり、リハ専門職と行政職員が協働し、地域サロンや料理療法など積極的に地域サービスを展開していることなど地域での取り組みにおいても共有できました。

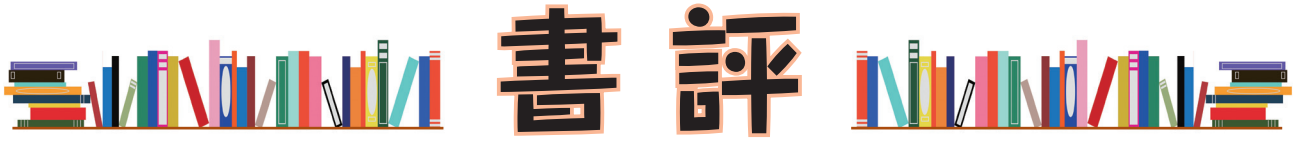
○ 参加者の声

「つながりを豊かにすること」専門職として地域との関わりを持ちたいと思う反面、どのように関わりをもったらよいのか、手段がわからない状況でした。このように他職種の方々と交流する機会があると今後の活動にもつながると思いました。また私たちＯＴが積極的に地域へ出向く機会を作ろうと感じる研修会でした。

○ 行政の声

塩谷町の取り組みについて、大変理想的な連携が取れていることに対して羨ましいな、当町でも頑張っていかなければ、と鼓舞されました。OTの方々が「認知症」について「専門職にできること」を考えてくれていることを知って、心強く思いました。

講義の中で行政の方より「つながりを豊かにすること」を大切にしているとの思いが聞け、そのつながりの中に多くの作業療法士が関われるよう支援していきたいと思います。認知症の方への関わりも含め地域共生社会の実現に向けては、老年期だけでなく、精神や発達など領域を超えた取り組みも求められます。多くの方が地域に関わっていただけたら幸いです。



『トラベルビー人間対人間の看護』

～第10章　人間対人間の関係　４つの位相～

著者：ジョイス・トラベルビー　訳：長谷川 浩・藤枝知子　出版社：医学書院

栃木県立のざわ特別支援学校　**渡邉 貴子**

私は特別支援学校で勤めており、そこでは教員をはじめ多職種と一緒に、生徒の生活や授業に関わっている。共通理解のために生徒の全体像を整理することも多い。それぞれの職種の視点が理解されると、作業療法士として大切にしていることと重なる部分やその職種だからこそ深く考えている専門性を知ることができ、自分の役割も見えてくる。多職種と協働する難しさや、その大切さを日々実感している。先日、職場以外でも看護師と認知症の方の事例検討をする機会があった。本書は、その際の看護観の理解とともに、人が人と関わることについて、心に残った１冊である。

著者トラベルビーは、看護は対人関係の一連のプロセスであり、病気や苦しみの体験を予防したり、立ち向かったりできるように助け、必要なときは、この病気や苦しみを体験している患者自身が意味を見出して、自己実現していけるよう、個人・家族・地域社会を援助することであると伝えている。治療志向的な構えで関われば、看護師と患者という職種のカテゴリーとしてステレオタイプ化してお互いを見てしまう。人間対人間の関係とは、お互いがその人を独自な人間として知覚し合い、一つの体験・一連の体験の中で真の関係を結ぶことであり、そこに本当の看護が成立すると話している。その真の関係、ラポートを確立する先行として、４つの位相が紹介されていた。「①初期の出会い、②同一性の出現、③共感、④同感」

今回の事例検討では、看護場面でしっくりいかない患者との関係を、経過から振り返り、看護師が自己内省していった。人との関りは目に見えない大切なことが多く、共通理解するのがとても難しい。上記の４つの位相を参考にし、疾患特性と個人因子、さらにお互いの距離感を合わせて整理してみたところ、看護が成立しつつある様子が見えてきた。本書は看護の視点で書かれているが、人との大切な関りが丁寧に書かれている。共通した支援の中で、看護師との連携や協働について、作業療法士としてあらためて考える機会となった。また、こうして対象者を整理していく視点に、発達障害も老年期障害も共通していることがわかり、大変勉強になった。

専門書は心の余裕がないと１冊に向き合うことがなかなか難しいが、気になったこと・聞いたことを少しのぞいてみて、そこから広がってくる何かを感じたり、探ってみたいと考えたりした時に、他のページもめくってみればよいのではないかなと思っている。

第48回

「ほOTひと息」

国際医療福祉大学塩谷病院　**佐藤 優天**

私は、総合病院の急性期領域で６年間勤務してきました。特に多く携わらせていただいた分野は、がんのリハビリテーションです。中でも消化器外科を担当し周術期や化学療法にてがんと闘病するがんサバイバー、そして終末期にあたる患者様たちにも関わらせていただきました。その経験で感じたことや考えていることについてまとめてみたいと思います。

実際には骨折や運動麻痺の障害を持つ患者様とは違い、ADL が自立している方も少なくありませんでした。“がん”という病気に直面し精神的にも負担を抱えながら、その様な患者様達に対して身体機能の維持目的での運動や病状に合わせた生活面での指導を行ってきました。しかし根治が難しい場合もあり、できていたことができなくなって最後を迎える方も見てきました。ある方は、大工の仕事を入院直前まで行っていて再開の希望がありました。状態が進行してしまっていて、そのことも自身が分かっている中で大工の引継ぎだけは行いたいと、外泊でできることを行う時間を作りました。実際の外泊では引継ぎを行うことができ、家族と過ごす時間も作ることができました。しかしこの方のことを振り返ると、やりたいと言っていたことは実現できましたが、徐々に状態が悪化していく様子や亡くなってしまったという事実にギャップを感じていました。そのため、残されていた時間の過ごし方や苦しそうな様子を見てどこまで本人の希望に沿ってよいのかを考え悩んだりします。大学の教員に、がんという病気は残された時間があるのではないかという話をお聞きし、この方も自身の残されていた時間と向き合っていたんだなと私は考えましたが、みなさんはどのように考えますか。

近年コロナウイルス感染症の流行に伴い、病院で家族のお見舞が難しくなり、外泊や外出も困難になりました。終末期の患者様にとっては、最後の過ごし方へ大きく影響したと思います。患者様にとっては残された時間がない中、大切な家族と会うことも難しくなりました。その人にとっての家族や大切な人との、貴重な時間がより貴重となったと感じました。終末期の患者様たちとの関わりを通して、患者様の最後にやりたいことには、現実的にできることとできないことがありますが、その人らしさを守るためには、本人の想いや家族の想いといった様々な想いをくみ取る必要があります。次の職場では緩和ケア病棟を希望していますが、その人らしさを尊重した人生が送れるよう支援ができる作業療法士になりたいです。

編集後記

年度末になり退職や入職、転職のタイミングの時期となりました。１年間を振り返り個人やチーム、部門の課題解決や目標の達成状況はいかかでしょうか。何かを継続することは非常に労力いることで仲間が不可欠と思います。今年度も広報誌をお目通しいただきありがとうございました。